

.....

淘汰反響

小田垣孝・九州大理学部長

連載を読んで、大学の専門学校化が始まっていると実感した。大学の社会的な定義それ自体が変わってきているのだと思わざるを得ない。私が学生だった60年代は、学園紛争でいろいろと批判はあったが「大学は学問の府であるべき」という認識は共有されていた。現状を見ると、「学問の府」もやがて死語になるのではないかと危惧する。

私立大学に比べ、国立大学はまだ恵まれている。それでも04年の大学法人化以降「生き残るために特色を出さねばならない」という強迫観念が強まっている。多くの国立大学で、「ブランド化」を合い言葉に、特産品を造ったり、特定の研究分野が強化されている。だが、ブランド強化にばかりこだわれば、日本の科学技術を支える地道な基礎研究や大学本来の教育がなおざりになる恐れがある。目新しい取り組みのみが奨励される文部科学省の各種事業のあり方も問題だ。

連載の冒頭に学生の基礎学力不足が取り上げられているが、学習意欲の低下も深刻だ。九州大でも、学生による授業評価で「しゃべったことをすべて板書してほしい」という意見があった。小中高と“至れり尽くせり”のプリントで育ってきたのか、ノートを取る技術も自ら学ぶという意欲もかなり低下している。

大学は、本来自らの手で学生を育てるところであろう。大学にはそれぞれ学風があり、高等教育は全体として多様な人材を育ててきた。ところが、講座を丸投げするなど過度のアウトソーシングで規格化された学生を大量に送り出せば、社会の活力は失われかねない。

社会の健全な発展のためにも、大学は政治や経済と適切な距離を保ち、批判的な視点から物を言う役割を放棄すべきでないし、またその役割は保証されるべきであろう。企業向けの人材育成を目指した実用的知識の教育ばかりが重要視される現状は嘆かわしい。

小田垣紹介

おだぎ・たかし 1945年生まれ。京都大理学部卒。ブランドイス大助教授、京都工芸繊維大教授、九州大理学部教授を経て現職。専門は理論物理学。